

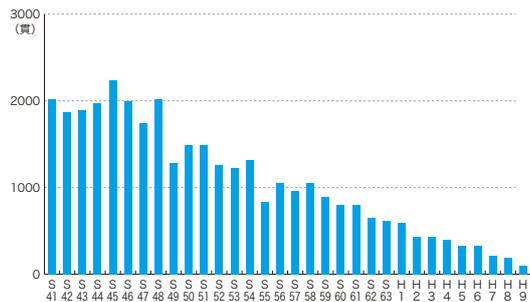


山形大学准教授 林 雅秀  
はやし まさひで

## コモンズと只見の共同利用資源②

### ―山手帳にみるゼンマイ採取量の変化―

前号では叶津の昭和四一年以降の山手帳を資料として、昭和四一年時点のゼンマイ採取状況を紹介しました。この山手帳には、昭和四一年から四五年までの五年分の世帯ごとのゼンマイ採取量やそれに応じた山手金支払い額が記載されています。その後の昭和四六年から平成元年



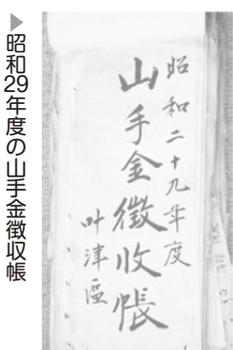
▲叶津のゼンマイ採取量の推移(昭和41年~平成9年)

までは別の「山菜山手帳」というタイトルの資料にゼンマイ採取量と山手金額が記載されています。さらにそれ以降は別の資料に平成九年までのゼンマイ採取量が記載されています。これらの資料をつなぎ合わせると昭和四一年から平成九年までの三十二年間については、ゼンマイ採取量の推移を確認できます。それを図にするとゼンマイ採取量もっとも多かったのは昭和四五年の二、二三八貫で、それ以降は平成に入るまでほぼ一貫して減少が続いたことがわかります。

さて、昭和四五年の天然ゼンマイから、叶津ではどのくらいの収入を得ていたのでしょうか。これについては現時点で正確な収入額は不明です。過去のゼンマイ価格については筆者の手元には断片的な情報しかないためです。昭和四四年六月三日の朝日新聞夕刊によると、昭和四一年に貫当たり三、五〇〇円ですが、この時期に高騰して、翌四二年には四、五〇〇円、四三年には七、〇〇〇円まで上昇したとされています。ちなみにこの記事のサブタイトルは「ぜんまいがバカ値」で、あまりに急な価格高騰に仲買人も困っていることが紹介されています。もう一つの情報源として「広報ただみ」のバックナンバーを見ると、昭和四九年六月一〇日号では貫あたり二万円、翌五〇年七月一〇日号では二万五千円から三万

円であると紹介されています。これらの記事の主旨は、ゼンマイをはじめとする山菜が只見町全体でも米に次ぐ主要な収入源となっていることを紹介するものです。断片的な価格情報から推察すると、昭和四五年時点での価格は貫当たり一万円前後ではなかったかと思われ、叶津では二千万円以上のゼンマイ収入があったと考えられます。

次は、価格が高かった昭和五〇年の収入はどうでしょうか。この年の総生産量は一、四九七貫ですから、価格が二万五千円だとすれば総売上高は三、七四二万円です。この年の最多採取者の採取量は七〇貫で、この人の売り上げは一七五万円です。昭和四〇年代から五〇年代は日本全体の物価上昇率も平均的な賃金上昇率も高いので注意が必要ですが、この年のサラリーマンの平均年収は二〇五万円(賃金構造基本統計調査)なので、これと比べて最多採取者の収入は〇・八五倍にも及ぶ金額だったこととなります。これは筆者の推察ですが、このようにゼンマイ採取期のみで得られる所得



▶昭和29年度の山手金徴収帳